

1. 第15回日本丸マスターズ大会開催

第15回大会は、11月13日(月)、初めて箱根くらかけゴルフ場にて開催。



ゴルフコースからは富士山と芦ノ湖を眺めることができ、雲ひとつ無い天気のもと、ボールを追いかけ、18ホールを歩き通しました。



優勝は、大本命の佐藤さん。ベスグロ・ニアピンを合わせ、三冠王を達成しました。おめでとうございます。次回は来春、新人さん歓迎です。

順位	氏名	In	Out	GRS	HDCP	NET	
優勝	佐藤 精吾	38	46	84	12.8	71.2	BG, NP3
準優勝	米岡 泰	46	48	94	22.4	71.6	
第3位	松山 英明	52	51	103	29.6	73.4	新人
第4位	川島 通明	55	51	106	29.6	76.4	
第5位	高野 弘康	55	51	106	28.4	77.6	NP1
第6位	小永井 晃	58	59	117	33.2	83.8	
第7位	山路 永司	57	59	116	32.0	84.0	
第8位	坂井 猛二	64	56	120	35.6	84.4	
第9位	久保井敬二	61	63	124	36.0	88.0	BB
第10位	本間 英臣	66	70	136	36.0	100.0	新人

2. 旨い! 登山部ハイキングで盛大に芋煮会

合唱団登山部では、11月26日(日)、御岳山～日の出山のハイキングを行いました。参加者は(T1)中野、(T2)小永井、椎野、下田、本間、(B1)伊藤、原田、山本、(B2)山路、以上9名でした。

当日、予定した川崎発「奥多摩ハイキング号」が運休というトラブルがあり、ネットで取った時刻表の運転日注意のマークの見落としが原因でした。慌てたものの、それでも、直後の立川行きに全員が揃い、立川で新宿から来た「ホリデー快速・奥多摩1号」に乗り継ぎ御嶽駅に8時59分着。バスでケーブルカー・澤本駅へ。急勾配のケーブルカーからは山々が次第に広がり所々に紅葉が見られました。まず、武蔵御岳神社を目指しました。以前来たときの印象と違い、神社まではかなりの急勾配が暫く続きます。神社では各人、神妙に何事か祈念、勿論、合唱団の発展と団長のご健康を祈念したことは言うまでもありません。

ここで水の補給、中には何十年も前に買ったポリタンクが破れていたことを発見した人も約1名

居ましたが、深い山に入っただけの水場でなくて良かったですね。ここから日の出山を目指して尾根道を歩きました。道は割りと平坦で、両脇に杉木立が続きます。日の出山の頂上へは、少し長い階段がありましたが、歩き出して1時間少しで頂上着。天気は曇り、それでも遠くの間々や下界の景色が良く見えました。

さて、本日のメインテーマ・芋煮会は、頂上をちょっと下がったベンチ3つを陣取りました。そこは風も当たらない陽だまりで、絶好の場所。既に少し離れた所で他のグループ10人位が盛大に焼肉などをやりました。



芋煮の材料・道具類は各自が分担して運び上げました。まず、中野さん分担の缶ビールで乾杯。コンロ(山路)に鍋(本間)をかけ、新聞に載っていたレシピの切抜きの手順に従い材料を入れます。水をドボドボ入れ、だし汁、里芋、大根、コンニャク(原田)、ジャガイモ(下田)が煮えるまであちこちからワイン、日本酒などが出され、それを飲みながら鍋奉行が多数出現。ワイワイやっているうちに芋類が煮えたところで、調味料(伊藤)、牛肉、豆腐(椎野)、シメジ、葱を入れて完成。味付けは、健康を配慮して、また若干関西風に薄味。各人約3杯位は食べて、最後はカレーうどん。残りの汁に



水を継ぎ足し一人1玉のうどんとカレー粉(小永井)を入れます。これも完食。なお、鍋を作り始めたところで、山路さんが別に持参のコンロでラーメンを作り始め、「これを食わないと山に来た気がしない」ということでした。恒例の山での合唱は、中野さん作成の歌集により、最後はセイリングセイリング。近くのグループから一人の男性が来て、団の名前など聞いてました。残念なことに、鍋には良い場所ただただ、聴衆不足。

下りは、少々の急坂がありましたが、歩き易い道でした。約1時間半で「つつつる温泉」着。入浴してみれば、その名の通りつつつるしました。約2時間ゆっくりして、5時10分発のSLバスで武蔵五日市駅へ。

当初、23日の予定でしたが、事情があり26日に変更したのが大正解。23日は雨。当日帰宅して寝込んだ頃から大雨となりました。当日晴れたのは御嶽神社のご加護の賜物。

なお、次回の春のハイキングは、帰りの車中で企画担当は椎野さんと決まりました。多数のご参加を心からお待ちしております。

(文中、敬称略。T2・本間)

[編集後記] 33年前購入のポリタンを持って行き、ワイン以外の水がなくなり、ラーメンの水を恵んでもらったのは、私です。ポリも体力も大いに劣化していることを再認識しました。同じく33年前の山靴も、貫禄はあれど、足幅が成長したこともあり、履き心地はかなり変わってしまいました。(B2:山路永司)